

'83年版ベスト・エッセイ集

耳ぶくろ

日本エッセイスト・クラブ編



文藝春秋

'83 年版ベスト・エッセイ集

耳ぶくろ

日本エッセイスト・クラブ 編

文藝春秋

耳ぶくろ

昭和五十八年八月一日 第一刷

定価 千二百円

編者 日本エッセイ
スト・クラブ

発行者 西永達夫

発行所 株式会社
文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三―三
電話(〇三)二六五―二二一

印刷所 精興社

製本所 中島製本

万一、落丁乱丁の場合は

お取替致します

© BUNGEI SYUNJU 1983

Printed in Japan

目

次

耳ぶくろ

標準語のルーツ

パロディなど

墜落

体当り

二つの教訓

失われし千金の夢

ラテン・アメリカ人の指さき

四十二年目の再会

老婦人と青年たち

隣りの住人

近頃なぜカリヴァイヴァル

遠い潮騒のように

暉峻康隆

武川忠一

木下是雄

村上巖

和田晶二

野坂昭如

開高健

山口進

落合恵子

新藤兼人

本間千枝子

望月照彦

12

16

20

24

29

33

40

47

51

55

59

64

洋上会見

かぶと

江戸時代の舟乗りたち

耳ぶくろ

大石 寛

金子 兜 太

春 名 徹

戸 板 康 二

69

76

81

86

下駄の音

新春富士雑感

雁渡し

さくら坂

三河島

供養塔

散歩者の弁

漁師料理の旅

木下 隆 一

能村 登 四 郎

谷 田 啓 一

木 曾 秋 一

三 浦 哲 郎

阪 田 寛 夫

宮 原 昭 夫

94

101

106

110

115

120

126

ふり出しへ戻る

窓辺の花

晴れ着

青い眼の長門艦長

内証の話焚き火道楽

山陰まぐらの草子

下駄の音

一枚上手の女

父への感謝

汗が子を育てる

父を着る

野次馬人間

村松友視

奥山益朗

中道操

阿川弘之

長野泰一

内藤美智子

澤地久枝

栄久庵憲司

酒井大岳

多々良英秋

大宜見義夫

192 186 179 174

167 157 151 147 139 135 132

ある総会屋

チーズ！

賽子と渦

とてもいい心臓です

マンガース物語

猫の動物学的宇宙誌

人がサルに笑われる

ゴリラのお気に入り

ちょっといい酒

「パパラギ」でビールを飲む

酒ハ及バザレバ乱ス

一枚上手の女

藤原作弥

小野昇

大庭みな子

早坂暁

梶山雄一

日高敏隆

河合雅雄

川崎泉

小田島雄志

村上龍

小倉芳彦

松田銑

紅葉と美妙

畑の中の友だち	深沢七郎	260
わが友、ホッカイさん	佐江衆一	265
母の三味線	登張正實	270
父実篤のハガキ	武者小路辰子	274
太宰治の手紙	掛川恒夫	281
傷心の潮路 松井須磨子と木更津	益田清	286
因縁 —— 鹿野と私 ——	小堀杏奴	291
職業	三浦朱門	300
俳優からの挑戦状	福田匡恭	306
役者のイボ	河地四郎	309
いまわのきわ	宇野信夫	316
辞世の句	飯田龍太	320

池田弥三郎君とオウム

金原亭馬生の死に方

紅葉と美妙

あとがき

金田一春彦

結城昌治

井伏鱒二

347 339 330 326

耳ぶくろ

—

'83 年版ベスト・エッセイ集

装幀
竹内和重

耳

ぶ

く

ろ

標準語のルーツ

暉^{てる} 峻^{おか} 康^{やす} 隆^{たか}

(早稲田大学名誉教授)

近世・近代の文芸に接していると、その媒体である言語について、無関心ではおられない。ちようにいい機会だから、江戸語↓東京語↓標準語のルーツについて、考えていたことを申しのべたい。

王朝から中世までの日本の文芸を支えた代表的な言語は、京都の貴族と武家のそれであった。十七世紀の初めに江戸幕府が開かれたが、それから一世紀あまり、江戸中期の享保の頃までは、江戸言葉は方言の域を脱しなかったから、依然として上方言葉が文学を支えている。その方言であった江戸言葉の原点は、家康を頂点とする駿河武士の言葉と、上方系統の下町の町人言葉と、江戸周辺の関東方言であった。

北条遺臣の三浦浄心が『慶長見聞集』で、江戸城では家康が駿河訛りでしゃべるので、諸大名もそれに合わせて駿河訛りでしゃべった、と言っている。寛永年中に参勤交代の制度が発足

し、諸国諸大名が家臣を伴って江戸に在勤することになったが、当初はもちろんお国訛り丸出しで、統一的な侍言葉などあるはずもなかった。当時の江戸言葉一般について、宣教師のロドリゲスが、『日本大文典』（慶長九年）で次のように言っている。

三河から江戸にかけての関東地方は、物言いが荒くて粗野な言葉が多く、「行くべい」「読むべい」といい、「申さない」と打ち消しの「ヌ」の代わりに助動詞「ナイ」を使い、移動を示す「へ」の代わりに「都さのぼる」と「サ」を用いるとある。当時の関東方言を、江戸庶民は用いていたのである。

しかし家康が埋め立てて造った江戸通り町を中心とする下町に、上方商人が大量に進出してくると、当然、当たりの柔らかい上方のアクセントとともに、「さばよみ」「でくの坊」「しにせ」「へそくり」「ちよろまかす」「ねぎる」といった上方言葉が持ちこまれていく。それも元禄頃になると、「ベイ」「サ」などの方言を使わなくなったと、戸田茂睡の『梨本集』に見える。また太宰春台が享保期の江戸について、元禄以降三十年、江戸の男女の風俗・言語・物の名はひどく京都に似てきた、武士の心までも京都風にソフトになった、と言っている。すでに世界第一の人口百万の都市となった江戸が京都文化を摂取して、風俗・言語ともに洗練されつつあった情勢を伝えている。

しかし元禄を過ぎても文運は上方にあり、会話を必要としない定型詩の和歌・俳諧をのぞき、

西鶴没後の浮世草子（京都・八文字屋本）、近松門左衛門や紀海音、それに続く竹田出雲らの浄瑠璃（大阪・竹本座と豊竹座）は、依然として上方の手中にあった。

ところが、八文字屋本の板木一切を四代目八文字屋自笑が売り払い、竹本座と豊竹座が店仕舞いした上方文芸終焉の時点である明和期（一七六四―七二）になると、江戸では待っていたように江戸言葉を用いた最初の浄瑠璃『神靈矢口渡』（一七七〇）と、会話を主とした洒落本『遊子方言』（一七七〇）が登場している。粗野な方言と見なされていた江戸言葉が、王朝以降、日本の文学を支えてきた上方言葉と交替したという、文化史上まことに画期的な時点である。

こうして、マンネリズムに陥り衰退した上方文学に代わって、経済的にも、市民としての性格においても、言語においても、主体性を確立した政権の所在地の江戸が日本の文化の受け皿となり、幕末にかけて約一世紀、会話体を主とする写実的な洒落本、黄表紙、滑稽本、人情本、それに江戸落語などの市民文芸の全盛期を迎えたのである。

京都の女中の詞をまねて記したきことなれども、江戸の乙女によみ易からず。また京大坂の娘御方には、その詞の似せ損ひたるをよみづらく笑ひ給はん。近来やつがれ綴りし人情本にて、当世江戸詞を諸国の娘御達も大方よみ覚え給ひし由なれば、拙き筆に他国の方言を記さず。

これは為永春水の人情本『処女七種』（一八三六）の中の挨拶であるが、すでに江戸言葉が全